

# 音楽科授業づくり指導の実践報告

— 小学校教員志望学生への教育実習事前指導をととして —

## A Report on Practice Teaching to Create Music Class

Through Pre-teaching for Students Aspiring to Become Elementary School Teachers

緒 方 満

OGATA Mitsuru

本稿は小学校教員養成における音楽科授業実践力の育成に関する事例報告である。音楽科授業の遂行に必要な指導方略と指導方法を学生にどのように学ばせているかを中心に報告する。実践事例は、学生に教師役をさせ、《準備→実践→振り返り》の過程で模擬授業を行わせる授業研究として実施している。音楽科授業には、①「音」が学習の対象であること、②同一課題を同時に一斉に行う学習課題が多いこと、および③表現活動が主たる活動であること、の3点の特質がある。これらをふまえて、授業方略としてリーダーシップを発揮すること、示範を行うこと、および指導的評価活動を行うことの重要性を強調した学生への指導を実施している。

### 1 問題の所在

小学校教員志望学生に授業実践力を身に付けさせることは小学校教員養成機関の責務である。学生には、将来、担任するであろう児童1人ひとりに確かな学力と豊かな社会性を保障できる小学校教師としての任務が求められる。本報告は小学校教員養成における音楽科教育について、筆者が現在比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科の小学校教員養成カリキュラムにおいて学生に行っている音楽科授業実践力の育成に関する事例報告である。

まず、音楽科には他教科と比して音楽科に特有とも言える小学校教員養成で留意すべき2つの大きな問題を抱えていることを指摘しておきたい。

第1は、一般的な学生（音楽の習い事経験や音楽に関する課外活動経験が無く小・中学校9年間の義務教育音楽科授業が唯一の音楽学習機会だった学生）が身に付けている音楽科学力が非常に低いことである。板野・中山らは「学生達は9年間の義務教育期間に学んだ音楽の基礎的な知識が定着していないまま大学に入学している状況にある。おそらくこれは本学の学生に限ったことではなく、全国的な傾向であるといえるであろう。読譜力は決して高いものではなく、楽譜上に音名を「ドレミ…」とカタカナで付記する学生も多い」（板野・中山ら2017）と指摘している。

第2は、新任の小学校教員にとって、音楽科授業の遂行はしばしば困難な状況に陥りやすいことである。高見は「小学校音楽科においても、理想としていた授業を展開できず、日々困難に遭遇している新人教師が増えてきた」（高見2010）、「子どもがわがまま勝手に楽器をならしたり、立ち歩いたり奇声を発したりする等の理由で、授業が成立しない」といった事例を度々耳にするようになった。こ

のような問題は、大学を出たばかりの新人教師にも襲いかかっているのが現状であろう」(高見2008)と具体的な実態を取り上げて問題提起をしている。

したがって小学校教員養成カリキュラムにおいて学生に行っている音楽科授業実践力の育成は、上記2点の問題が少しでも解決に向かうことを視野に入れて実施されねばならない。すなわち、①学生には、音楽科学力を学校音楽教育段階の内容に立ち返って、再度確かな学び直しをさせ学生が備えておくべき音楽科学力を強固なものにすること、それに加えて学校音楽教育で身につける力とはかけ離れた弾き歌いの技術や知識(板野・中山ら2017)を身に付けさせること、②音楽科授業の成立を妨げる困難点を学習させ理解させ、その克服につながる指導方略と将来実施する音楽科授業が高い確率で成立するような指導方法を体得させること、である。

筆者は①の点について、2021年度より実践的実証的に研究を継続している(緒方他2022, 2023)。本報告においては、②の点について、つまり音楽科授業の指導方略と指導方法を学生にどのように学ばせているかを中心に報告する。

## 2 比治山大学小学校教員養成カリキュラムにおける音楽教育の概要

本大学において小学校教員をめざす学生のために用意された音楽科教育に直接関連する講義・演習は、「音楽Ⅰ」(1年前期)・「音楽Ⅱ」(1年後期)・「音楽科教育法」(2年前期)・「授業研究B」(3年前期)の4つである。本実践報告で中心に扱う、学生が教師役をする音楽科模擬授業づくりの指導は「授業研究B」において実施している。ここでは初年次からの基礎的学習として履修する「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」、そして2年時に履修する「音楽科教育法」の概要を述べる。

### (1) 演習科目「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」について

「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」の授業の目的は、小学校教員として必要な鍵盤楽器演奏スキルや歌唱力などを育成することにある。つまりこの2つの授業は学生自身が身に付けておくべき音楽能力の向上をめざすことに特化した授業である。1年間をとおして電子ピアノ60台が設置されたML音楽室において一斉授業形態で行われる。4名の音楽教育経験豊かな教師がチームティーチングで実施し授業主担当者(筆者)が選択した童謡を「弾き歌い」することができるようになること、童謡や小学校学習指導要領に示された歌唱共通教材曲24曲などを正しいリズムと音程で歌唱することができるようになることをめざして指導している(緒方2019)。ただ、音楽の習い事経験者を別にして、一般的な学生、つまりいわゆるピアノ初心者の学生にとってはかなりの努力が必要であり、同時に授業担当の教師たちにも緻密で粘り強い指導が欠かせない。

### (2) 講義科目「音楽科教育法」について

「音楽科教育法」の授業の目的は、小学校教員として必要な授業実践力の基礎となるさまざまなことに関する知識・理解、初等音楽教育の重要性の再認識を深めることにある。内容は、表現領域(歌唱・器楽・つくって表現)の指導法、鑑賞領域の指導法、音楽科授業づくり(授業計画の立て方・学習指導案の書き方・授業実践上の留意事項など)の方法、音楽科教育を取り巻く諸問題などである。筆者は、音楽表現活動を学生にさせることも取り入れたり、筆者が小学校教員時代に撮りためた動画を視聴させたり、できる限りリアルに具体的に授業を展開するようにしている。

そして本講義において最も筆者が学生に強く訴えたい内容は、音楽科授業を成立させることの困難性と音楽科教育そのもののすばらしさおよび音楽科教育の必要性である。

他教科とは異なる音楽科授業に特有の性質は、①「音」が学習の対象であること、②同一課題を同

時に一斉に行う学習課題が多いこと、および③表現活動が主たる活動であることの3点である（吉富1999）。筆者は、音楽科授業成立の困難性はこの3点の性質によって生じるものと考えている。①「音」が学習の対象であること、すなわち授業が「音」を素材とし、「音」を媒介とし、「音」に関わる情報を集めることによって構成されること。このため児童にはかなり集中力が要求されるし、ささいな私語や物音も妨害音になって授業を妨げることに陥りやすいのである。②同一課題を同時に一斉に行う活動が多いということは、クラス全員で同じ歌を同時に歌う・楽器を演奏する・楽曲を聴く、という学習形態となる。児童間に能力差、意欲差、個人差があろうが、児童全員で同じ課題に取り組むように指導することは至難の技と言える。③表現活動が主たる活動であること、つまり児童の歌唱活動や演奏活動であることによって、児童の主体性自発性が不可欠である。分かりやすく言うと、教師が完全な準備をして歌わせようとしても、子ども自らが歌わない限り、音楽の授業は成立しないのである。

ここで取り上げた①②および③の3点は、確かに音楽科授業の実践を困難にする要因であるが、しかし同時に、この3点は音楽科の最も誇るべき素晴らしい特質でもある。すべての児童に、このすばらしさをぜひ体験してほしい特質である。もし、これらの特質が失われれば、音楽科の存在意義はないと筆者は断言できる。この音楽科の存在意義こそ学生に気づかせ理解させ、納得させたい内容である。

### 3 音楽科模擬授業づくり実践の実際

「授業研究B」は、「授業研究A」「授業研究C」とともに小学校教員をめざす学生のために用意された演習である。小学校等で実際に学校現場経験を有する授業担当者数名の教員が、5～6名程度にグループ分けされた学生たちに対して、学生1人ずつに先生役をさせながら模擬授業を《計画→実践→反省》をさせながら授業遂行の実際について学習させていく。15回のうち、1グループに対して筆者に割り当てられる授業回数は5回分である。第1回は事前説明と教材曲の練習を、第2回は学習指導計画の立案を、第3回、第4回、および第5回は模擬授業（30分）を2本ずつ合計6本と、それぞれの模擬授業に対する事後協議会を15分ずつ行う。学生1人ひとりが担当する模擬授業の学習指導案へのアドバイスや個人指導は授業前に授業外の空き時間に適宜行う。

#### (1) 事前説明—指導方針の周知を図るために—

授業の進め方を下記のように説明した。

音楽科の模擬授業は、「6時間扱いで構成された題材『音の重なりを味わおう』」を6人で分担し、それぞれ第1時、第2時、第3時、第4時、第5時、および第6時をリレー形式で行ってもらいます。もう、だれがどの時間を担当するのかは、決まっていますね。

模擬授業実践において、筆者が最も留意して欲しいこと、そして、同時にその留意点が本演習の重要な評価のポイントであることを伝えた。

音楽科模擬授業の実施にあたっては、少し音楽科教育法の復習にもなりますが、音楽科授業における教師の役割を3つ思い出してもらいます。同時に、模擬授業者への授業担当者である私の評価のポイントにもなります。

#### ① リーダーシップを発揮すること

音楽科授業を成功させるには、教師の強力なリーダーシップが欠かせません。授業の初めか

ら終わりまで、すべての児童を掌握し、教師の指示どおりに学習活動を行わせねばなりません。児童が望む明るい元気でさわやかな教師の役割演技を実行しながら、授業がスムーズに進行するような指示・説明を的確に行うことが必要です。

## ② 示範を行うこと

実技教科である音楽科は、言葉で説明するよりも、先生が模範演技をすることが大事です。子どもに学習させたい歌唱や演奏は、必ず、児童の前で教師が先ず模範演奏をして見せましょう。そのとき、良いモデルと望ましくないモデルとの両方を示すとさらに児童の理解が進むと思います。

## ③ 指導的評価活動を行うこと

音楽科の学習には、児童が学習の達成状況を自己評価することが難しいという側面があります。ですから、授業中の教師の評価活動は重要です。児童が学習の見通しや達成感をもつためには、教師の指導的評価活動が欠かせません。児童の学習活動や表現に対し、「〇〇がいいよ」「よくできてるね」「〇〇が素敵だね」などの評価言を必ず行いましょう。

以上3点を特に重視します。音楽科授業評価の「コミュニケーション力・対応力」に相当します。なお、この3つは、授業の時だけ行えばできるというものではありません。事前の練習が必要です。授業研究Bで1グループ6名が音楽の授業をしますね。6名は、模擬授業の前に、この①～③の3点をどこでどう行うか計画し、それらを意識した練習もしておいてください。

この3点は、本報告で最も筆者が強調したい指導事項であり、模擬授業をととして学生に最も意識させたい点であり、もっと言えば学生に音楽科授業遂行のために最も習得させたい授業実践力のきわめて重要な基礎となる指導方略である。この指導方略が2(2)で述べた音楽科の脆弱性の克服につながると考えている。

優れた音楽能力を習得している学生がすぐに音楽科授業を成立させることができるとは決して言えない。板野・中山らは「音楽経験を多く積んできた学生であっても、彼らが教育者として幼稚園における音楽活動や小学校における音楽授業を展開するための知識や技能が蓄積されているかどうかは、非常に心もとない状況にある」(板野・中山ら2018)と指摘している。吉富は、「音楽授業を担当する教師は、音楽家としての専門的エキスパートであるだけでなく、音楽教育者としてのエキスパートでもあらねばならない」(吉富1999)と主張している。筆者は、リーダーシップを発揮できること、示範を行えること、評価活動を行えることが音楽教育者としてのエキスパートになるために重要だと考えている。

## (2) 模擬授業で使用している教材曲について

筆者が「授業研究B」で使用している教材曲は、歌唱教材曲が簡易2部合唱曲「空に雲に」(平野祐香里作詞 石村冬樹作曲:『小学生の音楽4』教育芸術社より)、器楽合奏教材曲が「茶色の小びん」(美龍明子作詞 ヨゼフウインナー作曲/浦田健次郎編曲:『小学生の音楽4』教育芸術社より)である。

### ① 「空に雲に」の教材としての有用性

通常の音楽科授業では歌唱活動が多い。したがって学生に歌唱指導を具体的に学ばせることは優先順位が高い。「空に雲に」は合唱の初経験にふさわしい楽曲構成になっている。すなわち斉唱部分、

輪唱的部分、和声的部分が端的でわかりやすくできている。学生にも歌唱に関する指導計画が立てやすいし、授業を展開することも進めやすい。

## ② 「茶色の小びん」の教材としての有用性

合奏の授業は、いくつかの担当パートのそれぞれの役割を理解したうえで、合奏の魅力を味わうことが重要である。「茶色の小びん」は、第1パートが主旋律、第2パートが副旋律（オブリガート）、第3パートが和音とリズム、第4パートが低音パート、というパートの役割が端的でわかりやすくできている。また、鍵盤ハーモニカ、ソプラノリコーダー、木琴、オルガン、および各種打楽器などの小学校音楽科で扱う主要な教育楽器を必然的に学習させることができるようになっている。学生にも器楽に関する指導計画が立てやすいし、授業を展開することも進めやすい。

## (3) 学習指導計画・学習指導案作成

6時間扱いの題材「音の重なりを味わおう」の指導計画は、グループ全員の協議で決定させる。本報告では、標準的なパターンの指導計画の実際を示す。

表1 標準的な指導計画

第1時	「空に雲に」主旋律の歌唱学習
第2時	「空に雲に」合唱学習
第3時	「茶色の小びん」主旋律による鍵盤ハーモニカの学習
第4時	「茶色の小びん」副旋律によるソプラノリコーダーの学習
第5時	「茶色の小びん」合奏学習
第6時	「空に雲に」合唱・「茶色の小びん」合奏の発表会形式のまとめ学習

教師役の学生は、この指導計画にしたがい、それぞれに任された模擬授業の学習指導案を作成する。筆者は、音楽指導内容をできる限り具体的に実践的に簡潔にアドバイスすると同時に、リーダーシップを発揮すること、示範を行うこと、指導的評価活動を行うことの3点を強調する。リーダーシップを発揮することは、実際に筆者の前で役割演技をさせてみる。示範は実際に歌唱させたり演奏させたりして直接指導する。指導的評価活動は学習指導案作成段階から常に意識させるようにする。

## (4) 模擬授業の実際

授業の導入場面では、本時の授業内容や目標を明確に児童に伝えることを指導している。

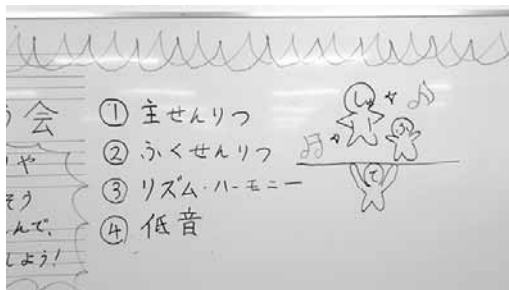


写真1 本時の授業内容の伝達



写真2 教師役学生のピアノ伴奏





写真3 児童役の学生



写真4 授業風景

写真2は、教師役の学生がピアノ伴奏をしているものである。筆者は必ず授業でピアノによる伴奏を実行することを要求している。望ましい伴奏ができる学生は少ないものの、誠実に練習に取り組み努力して伴奏を実施した学生を称賛している。写真3は、児童役の学生が教師役の学生の指示で鍵盤楽器を練習しているところである。児童役の学生にも、教師になったときのことを意識しながら児童役をすること、音楽活動は誠実に取り組むことを指示している。写真4は、教師役の学生が全体指導をしている場面である。明るい教師の役割演技をでリーダーシップを発揮することを要求している。緊張しながらも役割演技の重要性を意識した明るい表情とはっきりとした口調で教師役に挑戦する学生が多い。

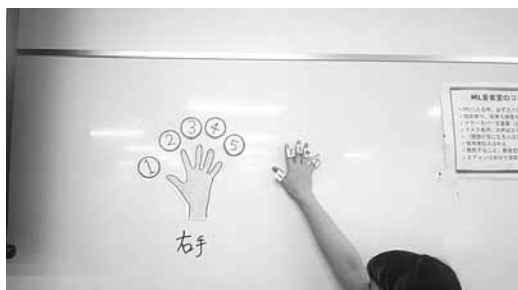


写真5 指使いの指導場面1 (ボード上で)



写真6 指使いの指導場面2 (スクリーンで)

写真5と写真6は、鍵盤楽器演奏上における正しい指使いを指導している場面である。学生のすばらしい指導の工夫が見てとれる。筆者は、そのような望ましい教師役を称賛するよう心がけている。

#### (5) 事後検討会における教師役学生に対する指導上の留意点

学生グループ相互の授業検討会においても重要な指導事項は、模擬授業において、リーダーシップを発揮すること、示範を行うこと、指導的評価活動を行うことの3点がどのくらいできていたかを総括させることである。筆者の講評も、できるだけ肯定的な言葉で、学生の優れた教授行為を取り上げて称賛するようにしている。

## 4 指導のまとめと今後の課題

### (1) 指導のまとめ

例年、学生たちは誠実に前向きに模擬授業に向かう。伴奏の練習、自身の示範の練習、指導計画・指導案作成、授業準備物の作成など真正面から空き時間を使いながら授業の準備を行っている。このことは、学生たちが音楽科模擬授業の実施に際して、何をどう準備し、実際の授業ではどのような《教授＝学習》を展開すればよいかを一定程度理解できているからだと考えられる。

また、模擬授業後の事後検討会では学生相互の活発な意見交換を見ることができる。このことも、授業における指導方略や指導方法を学生が自分のものとして把握できているからではないかと思われる。

学生のなかには、指導の工夫に優れた面を見せる学生もいる写真5と写真6は、児童に指使いと指番号を教えるために学生が考案した指導の工夫である。筆者は40年に及び音楽科教育に携わっているが、学生の斬新なアイデアや多様な発想にいくつも出会っている。良い意味で驚かされるとともに、筆者の学びにもつながっている。

### (2) 今後の課題

模擬授業において、学生が最も苦手とするのはピアノ伴奏ではないかと感じる場面にしばしば遭遇する。練習をして授業に臨むものの、緊張のあまりたどたどしい伴奏になりがちで、ましてや児童役の歌声の状況に応じて強弱や速度を臨機応変に対応させることは至難の技のようである。特にピアノ初心者の男子学生に顕著である。指導の改善については、今後の研究が必要である。

また、学生が児童役の表出する歌声や演奏に対して、それぞれに適切な評価言を発することにもかなりのとまどいをみせることが多い。状況に応じた適切な言葉がけが出なかったり、「よかったです」、「いいよ」などとかわりばえのしない評価言を繰り返したりすることがしばしばみられる。原因は、授業進行中に即座に児童役の表現の良し悪しや達成状況を判断できる能力の不足、そもそも学生が保有する音楽表現に関する語彙力の不足、の2点と考えられる。このことの克服も今後の研究が必要である。

## 《引用参考文献》

- 板野晴子・中山裕一郎他（2018）「教員養成課程における弾き歌いの指導法 —『ダルクローズ・ソルフェージュ』の「聴音練習」との関連付け—」『立正社会福祉研究』第19巻，pp.1-9.
- 緒方満（2008）「小学校音楽科の教育実習指導－実習生の授業実践力をどのように育成するか－」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.5 No.2，pp.57-62.
- 緒方満（2009）「小学校音楽科教師からの幼児音楽教育への提言－音楽科教育の現状と課題を交えて」『幼児の音楽教育法－美しい歌声をめざして』ふくろう出版，pp.102-107.
- 緒方満（2019）小学校教員・保育者養成系大学における音楽教育実践の課題と展望（1）－比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科の「音楽Ⅰ・Ⅱ」の実践より－『比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究』第5号，pp.48-52.
- 緒方満・大西潤一（2021）「小学校教員・保育者養成における音楽教育改善のための基礎的研究（1）－大学1年生への音楽教育経験に関する質問調査をもとに－」『比治山大学短期大学部教職課程研究』第8号，pp.130-137.

緒方満・大西潤一・吉富功修（2022）「保育者・小学校教員養成課程における音楽の基礎的能力に関する調査研究（1）—MLシステムを活用したリズム模奏の実技調査をととして—」2021年度日本音楽教育学会中国四国地区例会発表資料.

緒方満・大西潤一・高木栄次・吉富功修（2023）「保育者・小学校教員養成系大学1年生のリズム模奏力に関する研究—調査と実践をととして—」2023年度日本音楽教育学会第54回大会発表資料.

高見仁志（2008）「新人教師は熟練教師の音楽科授業の「何」を観ているのか—小学校教員養成への提言」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.5 No.2, pp.63-72.

高見仁志（2010）「小学校音楽科における新人教師の成長—遭遇する困難と力量形成」『音楽教育実践ジャーナル』Vol.7 No.2, pp.114-125.

吉富功修（1999）『音楽教師のための行動分析』北大路書房.

〈キーワード〉

音楽科教育, 小学校教員養成, 模擬授業

緒方 満（現代文化学部子ども発達教育学科）

（2023. 10. 31 受理）